

# 学生の読書が論文体テストの 成績に及ぼす影響

池 森 るみ子

電車の中でスマートフォン（以下、スマホ）を見ている人は多いが、本を読んでいる人は極めて少ない。以前は一つの車両に数人はいたように思うが、ふと気がついてみると自分だけなのかと思うことがある。今は読書する人が極端に少なくなった気がする。ある本<sup>1)</sup>の中で、雑誌の編集者が、かつては一息に読めるのが800字だと言われていたので一つのテーマで800字を目安に原稿を依頼していたが、「今は一息200字が常識となっている、それ以上長くなると読者から「読みにくい」、「何を言っているかわからない」とクレームがきてたいへん。」と述べています。娯楽雑誌の難しい内容とも思われないものでさえ長い文は好まれなくなって読んでもらえない、ましてや長文の本など読むなんて面倒くさいという状況になっているようです。さらにこの「本を読まない」という傾向は「読む」ということだけではなく「書く」という場面でも影響している気がします。大学生のテストの採点を行っているとき次のようなものが目に留まります。箇条書きのような短い文章を書いてあるもの、確かに書いてある単語には間違いはないのだけれども、単語の羅列のようになっていたたった5行で「お終い」というもの、またプリントに書いてある短い文章をコピーペーストして並べてあるようなもの、全体としての意味がわかってないが、主要な単語は書いてあるというものです。つまり、単語や短い文章を意味を考え

ずに丸暗記してそのまま書いているような気がします。これは、中高であまりなかった論文形式のテストに慣れていないせいなのかもしれませんが、それだけではなく、「読書離れ」で長い文を読み慣れていない、したがって長く書けない学生が増えているからなのかもしれません。そこで、今回の調査では、現在本当に読書しない学生が増えているか、および読書することが大学生の学力へどのように影響しているか、大学生の読書と論文体テストの成績（よい答案が書けるかですが）の関係を、調べてみることにしました。

## 調査法

教育心理学を受講している大学生に以下のアンケート A, B, C を実施しました。

A, B, C は異なる日に配布、したがって全員が3つともアンケートに回答したわけではありません。また覚えていないなど部分的に回答が書かれていない場合もありました。なお書籍数などあくまで本人の推定です。

なお、ここでの学業成績は単に答案だけに対する評価であって、実際の評価とは少し異なっています。また、後の成績との対応が可能な学生に限られるので、アンケートを実施できたすべての学生が対象となっているわけではありません。

## A アンケート

学校の授業ではなく、以下の本をどのくらい読みますか。

各ジャンルの本を月に平均何冊読みますか、また年に何冊読みますか。

（月に何冊という聞き方は従来の研究では多くなされているのですが、一つの本を何か月に亘って読む、あるいは夏休みなど休みの時にたくさん読む人もいることから考えて年に何冊か聞きました。）

- 1 小説（文庫本でも，単行本でも）
- 2 その他の本（文庫本でも，単行本でも）いわゆるハウツー本やエッセイなど他のジャンルに入らないもの
- 3 学術関係の本（哲学的な内容の本，社会学的な本など少し難しい内容の本）
- 4 新書版の本（論理的に書かれているもの，評論）
- 5 娯楽系の雑誌と教養系の雑誌（それぞれ何冊か）
- 6 コミック
- 7 写真集など（上記のジャンルにあてはまらない視覚的な本，写真集，美術書，古地図など）
- 8 新聞はどのくらい読むか 1 毎日 2 時々 3 たまに 4 めったに（読まない） 5 全く
- 9 インターネットでニュース（ネットニュース）は見るのか  
1 毎日 2 時々 3 たまに 4 めったに見ない 5 全く見ない
- 10 インターネット書籍（電子書籍）は利用するのか  
1 利用した 2 利用しない

## B アンケート（読書環境について調査）

- 1 あなたはいつぐらいから小さな字の大人用の本が読めましたか。
- 2 子供の頃よくお話を読んでもらいましたか。
- 3 家には本棚（本の置いてある場所）がありましたか。
- 4 家には本（雑誌ではなく）がどのくらいありましたか。  
1 特になし 2 250冊より少ない 3 50～100冊以上 4 100冊以上  
5 多数
- 5 周囲にはよく本を読む人がいましたか。
- 6 いつ本を読みますか。（答えは重複も有り）

- 1 待ち合わせ 2 電車の中 3 家に帰宅した後 4 喫茶店 5 休日  
6 その他

7 電車に乗っているときよく何をしていますか。(答えは重複もあり)

- 1 読書 2 スマホ 3 雑誌 コミック 4 パソコン 5 寝ている  
6 その他

8 携帯やスマホを持ったのはいつですか、何歳ですか。

9 本屋さんには行きますか。

- 1 よく行く 2 時々行く 3 たまに行く 4 めったに行かない

10 本はあまり必要なくなると思えますか。あるいは新聞はもはや必要がないと思えますか。思ったことを自由に書いてください。(ここは自由に書いてもらいました。)

### C アンケート (「朝読」について)

現在多くの学校で生徒の読書習慣をつけるため、「朝読」が行われているのでそれについて聞いてみました。

1 小学校, 中学校, 高校で「朝読」はありましたか。

- 1 小学校 2 中学校 3 高校

(答えは重複している場合もあり)

2 そのときは今より多く読みましたか。

- 1 読んだ 2 今の方が読んでいる 3 変化なし

3 「朝読」の時の体験に影響を受けましたか。

- 1 好きになった 2 特になし 3 嫌いになった

4 生徒が読書を多くするにはどうしたらよいと思えますか。また「朝読」の時のエピソードを書いてください。(自由に書いてもらいました)

## 1. 全体の結果と考察

表 1-1 書籍種類別冊数—A アンケート

種類	小説	その他	学術	新書	本合計	娯楽雑誌	教養雑誌	コミック	写真集
平均	13.5	2.2	2.4	2.0	20.1	7.1	1.3	25.2	0.9
最大	100	45	65	20	205	60	40	300	24
最小	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 1-2 本合計の人数分布

冊数	0	1～2	3～10	12	13～19	20～30	39 以上
人数	7	8	53	15	13	21	20
%	5%	6%	39%	11%	9%	15%	15%

結果の表示として一般に月平均で出されていることが多いのですが、月平均よりも年で出した数字の方が、読書数が多く、1年間の読書数の方を採用しました。(総数 137 名)

いわゆる「本」(雑誌, コミック, 写真集を除く小説, その他, 学術, 新書)の合計冊数は、平均は 20.1 ですが、人によって大きな差があります。最大値は 205, 最小値は 0 です。表 1-2 のように、1 年間にまったく 1 冊も読まないという人もいました。39 冊以上が 20 名 (48 冊以上が 14 名) で、20～30 冊が 21 名、13～19 冊が 13 名、12 冊が 15 名、3～10 冊が 53 名、1～2 冊が 8 名、0 冊が 7 名、となります。中央値は 12, 最頻値も 12 です。このうち 1 カ月に 1 冊も読まないものを「不読者」とすると (1 年間の冊数で言ってもらったため、1 カ月に 1 冊に満たないということで、年間 11 冊未満としました。), 68 名、全体の 49.6% となり、学生のほぼ半数が「不読者」にあてはまってしまいました。「不読者」は 1987 年度には 13.1% だったもの<sup>2)</sup>が、2012 年度には 40% 以上に増加した<sup>3)</sup>といわれていますが、さらに 10% 近く増加したということになります。また元々の出典は不明確なのですが、月に 4 冊以上 (年 48 冊以上) 読んだ学生が 40% (1985)

から 20% (2005) に減ったとも言われており<sup>4)</sup>、それが今や 10%程度しかいません。今回は授業内にアンケートを行ったので、思い出せた読書冊数が少なくなったのかもしれませんが、読書離れは相当進んでいるように思われます。

またジャンル別で見ると、小説平均 13.5 冊、その他 2.2 冊、学術書 2.4 冊、新書 2.0 冊と圧倒的に小説が多く、学術本や新書のような論文形式のものは少ないようです。また書籍以外のもの例えば雑誌については、週刊のものも多く、書籍とは異なりかなりの読書冊数があると思われましたが、意外に少なく、娯楽系雑誌でも平均 7.1 冊です。書籍の平均は 20 冊ですから、意外に雑誌は読まないと言えます。しかしコミックはさすがに多く、年に 100, 200, 300 と読む者もいて平均 25.2 冊となっています。ただ意外ですが、「本」と比べてそれほど多いというわけでもありませんでした。小説は多くの人が冊数は少なくとも読んでいるのですが、コミックは読む人と読まない人に差があります。

表 2 新聞、インターネットの利用状況 (137 人) — A アンケート

	毎日	時々	たまに	めったに	全く見ない
新聞をどのくらい読むか	4%	12%	28%	50%	6%
ネットニュースを見るか	23%	17%	13%	5%	42%
	見る			見ない	
電子書籍を読むか	32%			68%	

活字離れとしては、読書離れの他、新聞の購読離れも言われているので、新聞を読むかについて、およびインターネットの利用が高まっていることも考え、インターネットの利用状況についても調べてみました。

新聞については毎日読む人はたった 4% しかいませんでした。これは下宿や寮生で新聞をとっていない者が多いからかもしれないと思ったのですが、「めったに」50%、「全く読まない」6%からしてみると実家に帰った

時も読んでいないと思われます。かなり新聞離れは進んでいるようです。ではインターネットニュースは見ているのかというと、毎日23%、時々17%とこの二つで40%ほどとなり、新聞の16%に比べネットニュースの利用は多いようなのですが、全く見ない者が42%もあり、利用する者もしない者に分かれているようです。つまり半数近くの者は新聞を読むわけではないが、さりとて意識的にネットニュースを見たりもしない、漫然とテレビなどで情報を得ているものと思われます。

さらに「紙の本」は読まないがその代わりにインターネット書籍（電子書籍）を利用しているかどうか調べましたが、「読まない」68%となっており、また「読む」人でもコミックで利用するという記入があったことと、電子書籍の80%がコミックであるという話もあり、いわゆる「本」ではなくコミックの利用が多いのかもしれない。

なおインターネット書籍（電子書籍）や「紙の本」については直接聞いたわけではないのですが、Bのアンケートで「本はあまり必要でなくなると思いませんか、あるいは新聞はもはや必要がないと思いませんか」と聞いたところ、次のような回答が多かったです。「紙の本はなくなりますが、新聞は必要ない」という記述です。この「紙の本」の支持者は多く、それほど多読家とも思われない人の多くも「なくならない」と答えています。インターネット書籍（電子書籍）は多量の書籍を収容できて持ち運びに便利、部屋のスペースもとらないし、紙のごみも出ない、保存も限りなくできてよいと宣伝されているのですが、意外にそれほど本としては愛用されていないと感じました。理由として紙の本になれているからとありますが、私自身本屋に置いてあるタブレットを見て、読みにくそうだなと思います。紙の本は見開き2ページ分ありますが、タブレットは1ページ分しかなく、常にページをめくっていなければならず、ストレスを感じます<sup>5)</sup>。また紙の本でないと常に全体のどのあたりを読んでいるかは把握できませ

ん<sup>6)</sup>。今どこのあたりを読んでいるのかなとか、この事について確かあの辺に書いてあったなと後戻りして見ようとする時など不便です。また購買意欲をそそるといふ点でも実物の紙の本の方が勝っているように思われます。本屋に行く程度を聞かれて、「よく行く」、「時々行く」を合わせると全体の71%にもなります。最近の本は文庫本でも表紙が凝っており興味を引くような物も多く、書棚に並んでいるものを見て手に取って読んでみたくになります。小さな画面上から検索するものと実際に並んでいるのを見るのでは魅力度が違う気がします。お目当ての本をネットで検索して探してみることはあっても、実際に本屋に足を運んで「見ること」を好んでいる人は多いのではないのでしょうか<sup>7)</sup>。

一方、新聞の方は人気がなく、「なくなる」、「なくてもよい」という意見が圧倒的に多く、多読者においてすらそういう意見が多くありました。今後ますます新聞購読者は減少しそうです。しかし、中には「新聞は勧誘員がうるさくて嫌だと思っていたけれど、読んでみたら内容があり、たった一つの新聞で様々な情報に触れることができるので役にたつと思った。」という意見もありました。ただ考えてみると、テレビニュースは音声や映像なので時間の経過とともに見えなくなってしまうますが、新聞の記事はそのまま手元にあるのであの言葉が分からない、この内容が理解できないという時もう一度読み返し理解することができます。難しい内容の場合、瞬時に情報が通り過ぎるテレビやスマホでは理解できないような気がします。当然、内容を深く追求することもできません。また先の意見のように「多種多様なニュース」を見ることができず、テレビやネットニュースでは「限られたニュース」しか見ることができないところも問題です。しかし、こうした新聞の減少の問題点について触れているコメントがほとんどありませんでした。

表 3-1 読書環境①—B アンケート

	平均	最小	最高	総数
いつから大人の本を	11.5 才	9 才	18 才	108 名
スマホいつから所持	12.3 才	8 才	16 才	116 名

表 3-2 読書環境②

	有り	無し	総数
よくお話を読んでもらった	73%	27%	115 名
本棚があった	90%	10%	115 名
よく本を読む人がいた	68%	32%	114 名

表 3-3 読書環境③

レベル	1	2	3	4	5		総数
	平均	特になし	< 50 冊	50~100	100 冊<	多数	
本の量は	2.8	10%	37%	25%	19%	9%	115 名
レベル	1	2	3	4			総数
	平均	よく行く	時々	たまに	めったに		
本屋に行く頻度	2.04	35%	35%	19%	10%		116 名
項目	1	2	3	4	5	6	総数
	待ち合わせ	電車の中	帰宅後	喫茶店	休日	その他	
いつ本を読む	7%	53%	32%	9%	30%	21%	114 名
項目	1	2	3	4	5	6	総数
	読書	スマホ	雑誌など	パソコン	寝ている	その他	
電車時に何を している	34%	73%	4%	0%	32%	11%	114 名

レベルの内容とそのレベルの人数の％、および項目内容とその％は上記の通りです。なお「いつ本」と「電車時」は複数回答です。

「いつから大人向けの本を読んだか」に対し、8歳から18歳とかなり差がありますが、どんな本を大人の本と考えたのかによって異なっている気がします。平均は11.5歳小学校の6年、抽象的思考が可能になる時期と

重なっています。「(子供の頃)よくお話を読んでもらっていたか」の質問に対しては、有り73%とかなりの人が読んでもらった経験がありました。「本棚があるか」の質問には、有りが90%と多く、家庭に本がある環境であるということがわかります。さらに「どのくらいの本の量があるか」質問をしたところ、平均のレベルは2.7で3のレベル近くには来るのですが、50冊以下(1,2レベル)の者が47%に対し100冊以上(4,5レベル)のものは28%と、1,2レベルの者の方が多く、量自体はそれほどないようです。また周囲に「よく読む人がいたか」の質問に対し、「有り」が68%と読書に良い影響を与えた人が7割近くの人にいました。全体として子供の頃からの環境条件は「良い」と言えます。

なお、「いつ本を読むのか」と聞いてみると2電車の中という回答が53%と最も多く、あとは家にいる場合(帰宅後、休日)が32%、30%となります。しかし実際、「電車(に乗っている)時何をしているかの問いに、34%しか「読書」と答える人がいません。あまり読まないけれど読むとすれば電車の中ということでしょうか。また、電車の中では読書する人よりもスマホをしている人が73%と圧倒的に多く、かつては電車中で暇つぶしに本を読んでいたのに、いまはスマホにはまり、「読書」にその時間をまわすことをしなくなったものと思われます。現在の学生の読書冊数が減少するのはこのスマホの出現と大きく関係しているようにも思われます。そのスマホもしくは携帯の所持年齢の平均が13.6歳と中学生1年にまで下がっています。小学校高学年くらいから大人向けの本の読書が始まるわけですから、それまでの読書環境が整っているとしても、スマホに向かう時間が多くなれば本の方へと割く時間も少なくなり、読書は減少すると考えられます。さらに「本屋に(どのくらい)行くのか」の問いに、「よく行く」35%、「時々行く」35%を合わせると70%程度は行っています。本をそのとき購入するだけではなく見に行くだけのことも多く、こうして

本屋に見に行くと興味が湧いて、買って読んでみることも多くなり、読書の増加につながると思います。しかし「めったに行かない」者も10%ほどいて本屋にすら行かない、本にあまり興味を示さないという人もいますようです。

表4 朝読書経験—C アンケート

総数 129 名

	いつあったか	今より読書したか	変化
小学校	78%	今より多い 60%	好きになる 24%
中学校	71%	今の方が多 20%	変化なし 75%
高校	19%	変わらない 20%	嫌いになった 1名
なし		経験なし、不明を除く 116名中	経験なし、不明を除く 116名中

「朝読」の人数については小、中、高ともに経験がある場合もあり重複しています。(総数 129 名)

「朝の読書時間」は 129 名のうち、90%がいずれかの学校で「朝読」の体験があり、9%しか経験のないものがいませんでした。どの学校が多いかと言えば小学校が一番多く、次いで中学校が多く、この二つは同程度ありました。高校は少なく、20%程度しかなく、義務教育期間中に多くの学校で行われているようです。朝読の結果、小、中学校で「不読者」は少なく、若者の読書離れはないと主張する人もいます。「朝読」の効果については「体験がない」という人がほとんどいないので直接効果を比較することができませんでしたが、現在の読書状態と比べて、「朝読」のあったときの方が読書している」が60%、「変わらない」が20%となっており、「朝読」がなくなったのち、「朝読」がきっかけで読書習慣が身についたとは言えないようです。現在の読書冊数からみると、その時だけ不読者が減るのですが、その後読書する習慣が持続するわけではないようです。ただその結果「変化があった」わけでもないが、少なくとも無理強いされて「嫌

になった」という人はほとんどいません（嫌いになったと回答した者1名は多読者で、「朝読」の時間が好きでなかったというだけで、本を「読むこと」自体が嫌いになったわけではありません）。24%の者が「好きになった」と答えており、これをきっかけに読書に関心を持つ人もいるのだろうと思います。

## 2. グループ間の比較, 結果と考察

### (1) 多読者と少読者の比較

多読者と少読者の読書環境, 新聞およびインターネットの利用, 朝読の影響, および学業成績の比較を行いました。下記のアンケートのうち最低限 A のアンケートに回答してくれた者で, 出席数が 11 回以上あり, なおかつ試験を受けた場合だけを対象としました。なお, 多読者とは年 28 冊以上読書している者 (多読者といっても年間読書冊数は 200 冊から 28 冊までと異なっています) としました。本来ならば 40 冊以上としたいところなのですが上記の規定に合わせると人数が少なすぎるため, 基準を 28 冊までに引き下げました。なお少読者とは年 0~4 冊しか (4 冊の者は一名のみ) 読書していない者です。両者とも人数は 18 名です。なお両者の差については T 検定を行い, 有意差がある場合とは片側検定で  $P < 0.05$  以下としました。

表 5 多読者と少読者の書籍種類別冊数—A アンケート

種類	合計	小説	その他	学術	新書	娯楽雑誌	教養雑誌	コミック	写真
多読者	62	35.9	8.1	10.4	7.6	14	3.7	48.6	3.9
少読者	1.4	1.1	0.1	0.17	0	5.2	0.1	18.6	2.3

「合計」は小説, その他, 学術, 新書の合計です。

表 6-1 多読者と少読者の新聞およびネットニュースを見る程度—A アンケート

	新聞	ネットニュース
多読者	2.9 レベル	3.1 レベル
少読者	3.6 レベル	3.4 レベル

表 6-2 電子書籍の利用

	有り	無し
多読者	17%	83%
少読者	22%	78%

「新聞を読む」、「ネットニュースを見る」頻度を、5つのレベル（1 毎日見る、2 時々、3 たまに、4 めったに（見ない）5 全く見ない）に分類、小さい数字ほどよく見ていることとなります。インターネット書籍（電子書籍）は利用しているか否か（1か0）で分類、1と答えた者の%となります。

多読グループは合計冊数（小説、その他、学術、新書——書籍の合計）だけではなく、雑誌などすべての種類の出版物においても読む冊数が多いです。活字でないものに関しては、読書家よりそうでない者の方が見ているものと予想していたのですが、娯楽雑誌やコミックにおいてすら多読者の方が多く見ていました。また少読者は学術書や新書などはほとんど読んでいません、娯楽系の雑誌やコミックすら全体平均より少ないくらいです。

新聞を読んでいるかに関しては若干多読者の方がよく新聞を見ているかに見えますが、有意な差はありませんでした。多読者は、出版物は見ているのですが、新聞は時々見る程度でやはり「新聞離れ」はしているようです。ネットニュースの利用状況も同じ程度です。両者とも新聞もネットニュースのどちらも思ったほど見ていません

インターネット書籍（電子書籍）に関しては、少読者の方が若干22%と高めなのですが、多読者と有意な差はありませんでした。スマホがあれば

ほど普及しているにもかかわらず、ここで見る限り思うほど利用しておらず、多読者の17%しか利用したことがありません。「多読者」は読むのならば「紙の本」を好んでいるようです。

表7-1 多読者と少読者の読書環境①—B アンケート

	よく本を読んでもらう	本棚があった	よく読む人がいた
多読者	72%	78%	78% *1
少読者	67%	89%	44%

表7-2 多読者と少読者の読書環境②

	何冊あった	本屋へ行く程度	朝読書期間
多読者	3.11 レベル*2	1.72 レベル*3	8.17 年
少読者	2.28 レベル	2.64 レベル	7.33 年

子供の頃よく本を読んでもらったかどうか、本棚の有無、本をよく読む人の有無については、「ある」か「否」か（1ないし0）で、1と答えた者の%となります。本の冊数に関しては、（1は特にない、2は、冊数が50冊以下の場合、3は50～100の場合、4は100冊以上の場合、5多数）で分類、レベルの数字が大きくなるほど家の本の冊数が多いこととなります。また本屋によく行くかどうかは（1よく行く 2時々行く 3たまに行く 4めったに行かない）で分類、レベルの数字が小さくなるほどよく行っていることとなります。朝の読書期間は小学校の場合は6年間、中学の場合は3年間とした合計年数です。

読書を促すものとして、子供の頃、本を読んでもらうことは良いと言われていますが、「よく本を読んでもらった」については多読者72%、少読者67%と両方とも7割程度の者が読んでもらった経験があり、両グループに差はありませんでした。また、本棚があったかどうかについては、多

読者 78%，少読者 89%とむしろ少読グループの方が若干多いのかなと思えるくらいですが、有意な差はありませんでした。「朝読」の期間も両グループに差はありませんでした。

しかし周囲に「よく本を読む人がいた」の問いには多読者のうち 78%はいたが少読者には 44%しかおらず、両者には有意な差がありました (\*1  $t = 2.12$  自由度 34  $P < 0.05$ )。周囲にお手本となるような読書家がいたかどうかは子供に影響しているようです。

さらに家に「本が何冊(量)あったか」の間には、多読者は 3.1 レベル、少読者は 2.3 レベルと 1 レベル近く違っており、「有意な」差がありました (\*2  $t = 1.99$  自由度 34  $P < 0.05$ )。多読者の家庭の方が多く本を所持しているようです。また「本屋に行く」程度は、両者に有意な差がありました (\*3  $t = -2.94$  自由度 34  $P < 0.01$ )。読書家はよく本屋に行く傾向があり、読みたい本があるから「本屋によく行く」のかと思いますが、日頃からよく本を見ているから読みたくなるのかもしれませんが。本屋が比較的身近で、子供の頃からよく連れて行ってもらったなど、本屋に行く習慣があることが読書することにつながっているのかもしれませんが。

つまり多読者と少読者の環境上の違いは、「本が物理的に身近に多く置いてあり手に取りやすいか」、「お手本となる人がいてその人達が本を読んでいるのを見ているか」、「本屋へ行くなど本をよく目にするか」と関係しているような気がします。

表 8 多読者，少読者，電車時に何を（読書，スマホのみ）— A アンケート

	読書	スマホ
多読者	67%	6%
少読者	44%	89%

なおスマホとの関係が気になったので見てみました。スマホの所持年齢は多読者のアンケートの欠如が6名おり比較できませんでしたが、「電車で何をしているか」の問いに対し、多読者は項目の、「読書もしている」67%が「スマホも見る」44%より比較的多く、逆に少読者は1名（6%）のみ「読書もする」と答えていますが、89%が「スマホも見る」と答えています。全体の平均が73%ですから、少読者は暇な時間をスマホと接していることが多く、このことが読書しない原因の一つかもしれません。

表9 朝読書の効果—Cアンケート

	量的変化			好悪の変化	
	今より読んだ	今の方が読む	変わらない	好きになった	変わらない
多読者	25%	63%	13%	19%	81%
少読者	100%	0%	0%	24%	76%

「朝読」の体験がない者がおり、多読者16名、少読者17名となります。その中の%になります。

よく学校で行われている「朝読」の経験についてはどうかというと、若干多読者の経験時間の方が多いようですが、両者の間に有意な差はありませんでした。「朝読」の効果については、少読者は全員が朝読をやっていた時の方が「今より読書している」(100%)と答えており、その時は本を読んでいます。しかし好きになったものは24%いるのですが76%は「(好みに)変化なし」と答えており、なおかつ「今の方が読む」人が一人もおらず、効果が持続しません。ここで見る限り、「朝読」は本を読まない人には読書の習慣につながらないようです。

表 10 多読者, 少読者の成績と出席回数

	本合計冊数	出席回数	成績
多読者	62 冊	12.17 回	7.44 <sup>*2</sup>
少読者	1.4 冊	12.72 回 <sup>*1</sup>	6.06

今回の場合の成績の評価はテストの成績だけでの評価です。テストは論文形式で2問出題しました。一つの問題ごとに1~5のランクで判定され、(5のランクがAに当たる)2問の合計でみます(一番得点の高い者は合計10と、一番低い者は合計2となります)。Aグループは9~10と評価された者、Dグループは2~4と評価された者です(なお実際上の成績は出席も考慮するので、これとは異なっています)。出席数があまり少ないとよく答案が書けませんから、11回以上出席した場合を調査対象にしました。

平均出席数に関して、少読者の方が多く、両グループの間には差がありました(\*<sup>1</sup>  $t = -1.77$  自由度 34 片側  $P < 0.05$ )。出席数は最低11回以上としているのですが、出席数が14, 13回の方が、少読者グループには18名中10名(56%)いましたが、多読者グループは18名中5名(27%)と少なく出席率が低いです。

ところで成績に関しては、本を多く読む者(多読者)は読解力が高く、したがって相手の言っていることを理解し、自分の考えをまとめ、表現することが上手であると考え、読まない者(少読者)に比べ良いのではないかと予測しました。結果は、多読者の中には成績Aの者は18名中6名いましたが、成績Dの者も1名いました。逆に少読者の中にも成績Aの者はおり、個人差もあり少読者が必ずしも成績が悪いとは限りませんでした。しかしグループとしてみると、やはり成績は多読者, 7.44, 少読者, 6.06と多読者の方が成績はよく、有意な差がありました>(\*<sup>2</sup>  $t = 2.088$  自由度 34  $P < 0.05$ )。

## (2) AグループとDグループの比較（成績の異なるグループの比較）

Aグループとは、全員の中で、テストの評価が9か10の者（平均9.44）で、Dグループとは、全体の中で、評価が2から4の者（平均2.94）です。これは全体の中で成績だけで分けたグループです。したがって、読書量とは関係なく、Aグループの中に多読者もいれば少読者もいるし、Dグループの中にも、多読者も少読者もいます。したがって、Aグループと多読グループもしくは少読グループの中には重複している者がいます。Dグループも同様です。（なお参考のため「8グループ」（評価8の人）の資料も付け加えました。）3グループとも18名です。

表11 A, 8, D（成績別）グループの書籍種類冊数—Aアンケート

種類	本合計	小説	その他	学術	新書	学新合計	娯楽雑誌	教養雑誌	コミック
Aグループ	27.5D <sup>*1</sup> 8 <sup>*2</sup>	15.7	3.8	4.9D <sup>*3</sup> 8 <sup>*4</sup>	3.1D <sup>*5</sup> 8 <sup>*6</sup>	8D <sup>*7</sup> 8 <sup>*8</sup>	4.4	1.9	26.8
8グループ	12.7	9.1	1.2	1.3	1.1	2.39	7.6	1.4	41.6
Dグループ	12.7	10.7	1.1	0.6	0.3	0.94	11.2	0.6	10.9

D<sup>\*</sup>はAグループとDグループに、8<sup>\*</sup>はAグループと8グループの間に有意差があるという意味です。

この3グループの中では本合計冊数においてはAグループが最も多く、AグループとDグループの間に有意差（D<sup>\*1</sup> t = 2.35 自由度34 P < 0.05）があり、また8グループとの間にも有意差がありました（8<sup>\*2</sup> t = 2.31 自由度34 P < 0.05）。成績8と成績Dのグループ間に差はありません。小説、その他、学術、新書のいずれにおいてもつまり「書籍」においては、Aグループは他の2グループよりも多く読んでいるようです。なお、娯楽雑誌やコミックに関してはAグループと他グループには、特に有意な差はありませんでした。

また「本」の中でも、実は「小説」では有意な差はありませんでした。しかし、学術本や新書を読んでいるかについて、学術、新書、二つの合計について検討したところ、Aグループは、Dグループとの間に有意な差があり ( $D^{*3} t = 2.48$  自由度 34  $P < 0.01$ ), ( $D^{*5} t = 3.26$  自由度 34  $P < 0.01$ ), ( $D^{*7} t = 3.34$  自由度 34  $P < 0.01$ ) さらに8グループとの間にも有意な差がありました ( $8^{*4} t = 1.94$  自由度 34  $P < 0.05$ ), ( $8^{*6} t = 2.03$  自由度 34  $P < 0.05$ ), ( $8^{*8} t = 2.31$  自由度 34  $P < 0.05$ )。なお8グループとDグループとの間には有意な差はありませんでした。(しかし「学術」本や「新書」のいずれかを読んでいる人がDグループにおいては18名中5名しかいないのに、8グループでは18名中10名と、多い気がします。有意差はなくとも8のグループの方が読んでいるようです。)つまり、成績の良いAグループは「小説」では8やDグループと大差がないが、学術、新書などのいわゆる固い本を多く読んでいると思われます。

表 12 A, 8, Dグループの新聞, ネットニュース, 電子書籍の利用度—Aアンケート

	新聞	ネットニュース	電子書籍
Aグループ	3レベル	2.8レベル	39%
8グループ	3.2レベル	2.7レベル	22%
Dグループ	3.1レベル	1.6レベル	39%

新聞, ネットニュースはレベルの平均値, レベルに関しては前述表 3-3 を参照。インターネット書籍 (電子書籍) は有りと答えた人の%です。

新聞については, 3つのグループに差はなく, 3つのグループ共に新聞離れはあると思われます。ネットニュースについては成績Dグループが少し利用度は高そうですが他のグループと大きな差はありません。電子書籍についてもAグループとDグループが若干利用度が高そうですが, 他

のグループと比べ差があるとは言えませんでした。いずれにおいても3つのグループに違いはありません。

表 13-1 A, 8, Dグループの読書環境①—B アンケート

	よく本を読んでもらった	本棚があった	本をよく読む人がいた
A グループ	78%	94%	67%
8 グループ	89% D* <sup>2</sup>	100% D* <sup>3</sup>	78% D* <sup>5</sup>
D グループ	69%	78%	80%

表 13-2 A, 8, Dグループの読書環境②

	何冊あった		本屋に行く	
A グループ	2.67 レベル		2.22 レベル	
8 グループ	3.5 レベル	D* <sup>4</sup> A* <sup>1</sup>	1.78 レベル	D* <sup>6</sup>
D グループ	2.44 レベル		2.39 レベル	

レベルについては表 3-3 を参照。D\*は8とDグループに有意差有りの意味です。

「(子供の頃) よく本を読んでもらう」, 「本棚があった」, 「本をよく読む人がいた」, 「本屋に行く程度」に関しAグループと8グループに差はありませんが, 「何冊あった」では, 8グループの方が多く有意な差がありました (A\*<sup>1</sup>  $t = -2.64$  自由度 34  $P < 0.01$ )。また8グループは上記の5つすべてに関してDグループとの間に有意な差がありました (D\*<sup>2</sup>  $t = 1.98$  自由度 34  $P < 0.05$ ), (D\*<sup>3</sup>  $t = 2.20$  自由度 34  $P < 0.05$ ), (D\*<sup>4</sup>  $t = 2.75$  自由度 34  $P < 0.01$ ), (D\*<sup>5</sup>  $t = 1.76$  自由度 34  $P < 0.05$ ), (D\*<sup>6</sup>  $t = -1.97$  自由度 34  $P < 0.05$ )。またAグループとDグループの間に有意な差はありませんでした。数値から見ると, 予測とは異なりAグループは8グループほど「読書を促進する環境」にはおらず, 8グ

グループ、Aグループ、Dグループの順になっています。ただし、この中で最も読書冊数が少ないDグループはやはり「読書を促進する環境」にいる者が少ないようです。なお朝読の期間に関しては、Aグループに5名、朝読の体験がない者がいたため比較できませんでした。

### (3) 多読者とAグループとの違い

表14 グループの読書（本合計）冊数、成績、出席回数

	読書冊数	成績	出席回数	13, 14回出席者数
Aグループ	27.5冊	9.44	13回 D* <sup>1</sup> 多読* <sup>2</sup>	13名
8グループ	12.7冊	8	12.94回	12名
Dグループ	12.7冊	2.94	12.33回	12名
多読者	62.0冊	7.44	12.17回	5名
少読者	1.4冊	6.06	12.72回	10名

D\*はAグループとDグループの間に、多読\*はAグループと多読者の間に有意差ありの意味です。

読書量が多い者は成績が良いだろうという仮定だったのですが、多読者は少読者に比べ成績が有意に良いとは言えますが、多読者の成績の平均は7.44とAグループの9.44よりは低く、多読者の成績は中程度の成績です。たくさん読んでいるからといって、それだけ成績が良くなるとも限らないようです。

では多読者とAグループの違いはどこにあるのでしょうか。たとえば多読者のデータの中には使えないものがありました。アンケートの中に空欄がある者や、せっかく受講しながら試験を受けない者、出席数11回に満たない者がいました。またAグループは13,14回出席の者が18名中13名もいるのに対し多読者は18名中5名しかいませんでした。8グループ

は12名、少読者は11名と、Dグループでも8名います。出席数が11回という人も他のグループにはあまりいないのですが、多読者グループには4名もいます。多読者は平均出席数が最も低く、Aグループとの間に有意な差があります（多読\*<sup>2</sup>  $t = 2.95$  自由度 34  $P < 0.01$ ）。多読者は本を読むのは好きであるが「勉強熱心」とは言えず欠席しがちであり、これが、成績がすごく良いとは言えない要因の一つなのかもしれません。なお出席に関してAグループはDグループとも有意な差があり（D\*<sup>1</sup>  $t = 2.75$  自由度 34  $P < 0.01$ ）、良い成績をとるにはよく出席することが必要ということです。

表 15 グループのアンケートコメントの長さ

	成績	Bコメントの長さ	Cコメントの長さ	合計
Aグループ	9.44	4.98	D* <sup>3</sup> 少* <sup>4</sup> 多* <sup>5</sup> 4.57 D* <sup>6</sup>	9.55 D* <sup>1</sup>
8グループ	8	4.05	3.53	7.58
Dグループ	2.94	2.81	2.73	5.53
多読者	7.44	3.11	4.81	7.92 D* <sup>2</sup>
少読者	6.06	2.87	4.94	7.81

D\* はAグループとDグループの間に、多\*はAグループと多読者の間に有意差ありの意味。D\*<sup>2</sup>は多読者とDグループの間に有意差ありの意味です。

上の表はアンケートにコメントを書いてもらった時のコメントの行数を集計したものです。Bのコメントは「紙の本」や「新聞」に対する「意見」が書かれていることが多く、Cのコメントは朝読のときのエピソードが書かれていることが多いです。これは任意なので全く書かなくてもかまわないわけですから、ここで自分の考えを述べるということは、日頃から物事

を考えており、自分の考えたこと、感じたことを文章として表現できると考えられます。

2つのコメントの「合計」を見ると、Aグループがコメントの量が一番多く、AグループとDグループの間には有意な差がありました ( $D^{*1} t = 2.50$  自由度 34  $P < 0.05$ )。多読者とDグループの間にも差がありました ( $D^{*2} t = 2.05$  自由度 34 片側  $P < 0.05$ )。また8グループとDグループ、少読者とDグループとの間には有意な差はありませんでした。8グループ、多読者、少読者それぞれの間に差はありませんでしたが、Aグループは他のグループよりも文章力があるようです。

さらに2つのコメントについてそれぞれを見てみました。Bのコメントを見るとAグループはコメントの分量がこの中では最も多く、次に8グループが、その次が多読者、少読者、Dグループとだんだんコメントの量が減っています。Aと8グループの間に有意な差はありませんでしたが、AグループとDグループとの間に有意な差がありました ( $D^{*3} t = 2.35$  自由度 34  $P < 0.05$ )。また少読者との間にも差がありました (少 $^{*4} t = 2.16$  自由度 34  $P < 0.05$ )。さらに多読者の間にも有意な差がありました (多 $^{*5} t = 2.133$  自由度 34  $P < 0.05$ )。なお8グループと多読者、少読者、Dグループの間には有意な差はありませんでした。Aと8グループのあいだには有意な差はありませんが、大まかに言えばコメントの長さはほぼ成績に対応しているようです。

さらにCのコメントを見ると、Aグループ、多読者、少読者の3つグループに大きな差はありませんでした。ただしAグループとDグループだけは差がありました ( $D^{*6} t = 1.94$  自由度 34  $P < 0.05$ )。

主にエピソードや自分の感情などを述べるというCのコメントに関してはDグループを除き大きな差がなく、Aグループ、8グループ、多読者、少読者のどのグループも同程度書けるのですが、何か意見を論理的に述べ

るということが必要なBコメントでは、Aグループの方が書けるようです。テスト以外の場合においてもAグループは「論理的に書くこと」ができる人なのであって、論理的な文を書く力があることが論文形式のテストの高評価につながっていると思います。またDグループはどちらの文章であれ、書くこと自体が不得意です。一方多読者は多く読んでいるのですが、それが論理的文章を書くことには反映されません。つまり成績がよくなるにはよく読むだけではなく、論理的に文章を書けることが必要なのです。つまりもう一つの要因として考えられるものは「文章力」です。

### 3. 読書と学力

多読者と少読者を比べれば多読者の方が成績は良い。また成績の良いAグループはそうでない者に比べより読書をしている。読書することは抽象的思考力を高め、大学での成績を上げる第一歩と言えます。しかし昨今の読書離れ、活字離れは、大学生に浸透しており、年間読書冊数は少なくなっています。もちろん多く読む学生もいるのですが、48冊以上の者は全体の10%しかいませんでした。読書量の少ない学生が増加してくると学力の低下につながりかねないので、やはり読書はしてほしいとは思いますが。

この読まない人が増えていることに対し、子供時代からの読書習慣をつけようとする試みとして、子供に対する読み聞かせや学校における朝の読書時間の設置などが行われています。しかし、その期間だけは本を読むことは増えていますが、現状をみると読書習慣として定着しているようには思えません。もう少し子供の頃からの日常的な取り組みが必要かと思えます。この調査でも多読者と少読者の環境上の違いは意図的に本を読んで聞かせるとか、朝読の時間を設ける以上に、意識に上らないもの、「本が物理的に身近に多く置いてあり手に取りやすいか」、「お手本となる人がいて

その人達が本を読んでいるのを見ているか」、「本屋へ行くなど本をよく目にするか」と関係しているようです。本が身近に感じられる環境が必要と思われれます。

作家の恩田陸は「読書家」と言われているそうですが、山本周五郎賞の受賞の時、次のように言っています。「子供の頃、我が家には四つの個人全集があった。永井荷風、谷崎潤一郎、寺田寅彦、山本周五郎である。最初の三つは個人名が背表紙になっていたので内容は分からなかったし、荷風全集に至っては、崩し字だったので名前そのものが高校生になるまで読めなかった。」これら4人の人たちの全集ということになれば、結構な量の本があると思うのですが、まだちゃんと読むこともできない頃から大人向けの本がたくさんすぐそばにあったことが窺えます。学術的ではなく一般的な大人が読めそうなこうした本がたくさん置いてあるという環境が、自然に本に馴染んで手に取ってみるといった状況につながっていると思います。かつては一般的な家庭であっても〇〇文学全集など全集物が置いてあったような気がします。今や家が狭いのだから家の中はきれいにし、ゴミは出さないようにしましょうと、本は読んだ後すぐ売り払ってしまう、あるいは電子書籍を利用しますという環境では、本が子供の目に触れるチャンスがありません。学校に行けば図書館にあるだろうといわれるかもしれないませんが、家のそこそこに本があり、目に触れる機会が多いのとは違うと思います。いろいろな本があれば、子供は触っているうちに見る場合もあり、また時々親が読んでいるけどあれはどんな本かなと興味をひかれるのではないのでしょうか。多読者の家にある本の数はやはり多く、家にある程度の本があることが読書を促す効果がありそうです。

また、親や身近な周囲の人が読んでいる姿を見ることも、本を読みたいと思うことにつながるように思われれます。少読書者やDグループは、他のグループの人達に比べ本をよく読んでいる人が周囲にいることが少ない

という結果からも、絵本の読み聞かせだけではなく、親自ら本をよく読んでいいることも必要なのではないのでしょうか。周囲で熱心に本を読んでいる人を見かければ、「本」面白そうだな、読みたいなという気持ちが引き起こされる気がします。

少読者は「電車内でスマホを見ている」ことが全体の平均よりも多いという結果になっていますが、スマホに接する時間が長くなると、読書する機会が少なくなるように思います。町で見かけますが、ベビーカーを押しながらスマホをやっていたり、スマホに夢中になりながら食事をしていたりすれば、こどもはスマホには慣れても、本には馴染みがないということになります。「でもスマホだって活字じゃないか、本と同じじゃないか」と反論されるかもしれません。でもスマホは多くは写真や会話文で、書かれている文章も短い。大人向けに書かれている本の長い文章とは違いがあります。それに慣れると一息で読める文の長さが短くなり、本のような長い文章を目で追うという面倒くさい作業は避けられるのではないのでしょうか。スマホなどはあまり読書行動に促進的な影響を与えないともいわれています<sup>8)</sup>。

ところで、本をよく読む者は成績が良い傾向にあると言いましたが、ただ多く読めば読むほど成績が良くなるとは限りません。本の質も関わってきます。冒頭で、編集者が、読者の一気に読める量が200字に減った、長い文章を載せると読んでもらえないと述べている部分がありますが、根気がないというよりは長いパラグラフを読むとその意味がわからない、あるいは様々な角度からの話を総合して把握することができない人が増えているからだと思います。本もやはりある程度の長さがあり、長い複雑な展開がある物を読む必要があると思われます。また小説だけでなくいわゆる「固い本」(論文調の本)も読む必要があります。

Aグループの人は、8グループやDグループと「小説」の冊数には違い

がありませんが、学術本や新書の冊数において有意な差があります。また冊数は多読者に及びませんが、学術本や新書本を読んでいる人は72%と多読者(68%)と同程度以上います。大学での成績は学術本や評論を読んでいるかどうかに関わっているようです。言語能力には、「基本的対人伝達能力」と呼ばれているものと「認知、学習言語能力」と呼ばれているものがあると言われています<sup>9)</sup>。前者は永井<sup>10)</sup>によれば、これは「会話言語」にあたりますが、挨拶するとか、買い物をするとか、昨日あったことを話すとか、普段のありきたりなやり取りで使われる言語をさし、単に会話で話されているだけではなく、メールやラインで使われている書き言葉も含まれます。一方、後者は高度に抽象的な内容の理解、伝達に関わる言語で、単に書き言葉かどうかではなく、政治、経済問題について討論するとか、本や新聞記事や論文を読んだり、書いたりするとか、自分の主張を論理的にまとめて発表する時などに使われる言語です。子供向けの本や携帯小説などは会話がが多く、抽象的な言葉が少なく、具体的な内容を説明していることが多く、感覚や感情に訴えるものとなっており、多くは「会話言語」でなりたっていると思われます。反対に学術本や新書本は論文であり、抽象的な言葉も多く、「学習言語」で書かれているものです。もちろん小説であっても大人向けの本は文章が長く、抽象的表現が多く使われているおり、学習言語で書かれているものも多いのですが、ライトノベルのように子供向けと大人向けの中間のようなものもあり、明瞭には区別できません。本のうち、大人向けの長編小説や論文調の固い本は学習言語で書かれていると考えられますから、それらを読むことは抽象的思考能力を鍛えてくれ、当然大学での講義の理解を助けてくれると思います。また、大学の試験は自分の知っていること、考えていることを論理的に展開する文章を書く必要があります、学習言語が駆使できないと書けません。したがって試験でうまく答案が書けるには、論文調のものに慣れて使える必要があります、い

わゆる固い本をある程度読んでおくことが必要なのだと思います。

さらにもう一つ重要なことがあります。それは文章力です。Aグループは単なるアンケート上のコメントでも、ある程度の長さの文章を返してくれることが多いです。特に書くことを強制されたわけでもない場面で、気楽に文章が書けるということは、簡単に「文章を書く力」があるということです。多読者は本を読むことは好きなのですが、気軽に文章が書けるわけではないようです。ことに持論を展開するような場面で、Aグループは自分の意見を書いてくれても、多読者は書いてくれません。「読むこと」と「書くこと」は別物なのです。

近年、小中学生の学力テストが話題となっていますが、2012年度の学力テストでは、算数のテストの問題の二者択一問題で、正しい方の選択はできたにもかかわらず理由を書くことができない生徒が25%ほどいるとなっています<sup>11)</sup>。また、他の問題においても「書く」問題だったので答えなかったと述べる生徒もいて、書くことが苦手な生徒が多くなったと考えられます。それは小学生の段階から現れていて、中学生のほうがさらに率が高くなっています。よく大学の1年生が答案をうまく書けないといわれていますが、小学生の段階から「書くこと」に対し苦手意識が起きているということです。現在、学校ではあまり「書くこと」に時間が費やされていない気がします。作家の曾野綾子は自分が作家としてやられているのも、小学生時代、母親に毎日曜日、強制的に作文を書かされたからだと言っています<sup>12)</sup>が、読むだけではなく日頃から「書く」経験を積んでおくことが必要かと思います。「書く」ことでそれによって頭の中で整理のつかないことをまとめることができ、書いて初めてわかるということもあると思います。文章力はなかなか読むだけでは育ちません。自分でノートをとるとか、意図的に「書く」練習が必要と思われます。

## ま と め

現在の学生は10年前の学生よりもさらに読書量が減っているようです。新聞についても同様で、ほとんどの学生がたまにしか新聞を見ていない状況です（ネットニュースでさえそれほど見ていません）。また「紙の新聞」は必要でないかと答えている者も多いです。ただ「紙の本」はなくならないと答えている者は多く、多く読む人達の電子書籍の利用は以外に低いようです。むしろ本を読まない人達がコミックなどを見るために利用している場合もあるようです。

読書を促す環境としては、多くの者が「朝読」を経験しています。経験していない者が少ないため、比較することができませんでしたが、ただ「朝読」があったときは今よりよく読んでいますが、「朝読」が終わってしまうと読書しなくなる傾向にはあります。一方、家庭環境では多読者のほうが少読者より家の蔵書の数が多い傾向にあります。また周囲によく本をよく読んでいる人がいることが多いようです。読書を身近に感じられる環境が本を「よく読む者」をつくり出していると考えられます。

読書と大学の成績の関係は、次の通りです。読書量が多い者は極端に量が少ない者に比べ成績は良いと言えます。また、成績の良い者はそうでない者に比べ読書量が多いとは言えます。しかし量が多いほど成績が良いとは限りません。「読書の量」だけでなく、「読書する本の質」も関係しています。良い成績をとる者は、いわゆる固い本（学術本や評論）を読んでいることが多く、「小説」だけ読んでいるのではどうも不十分なようです。また、成績の良い者は、ある程度読書量があり読解力があるだけでなく、文章力もあります。それも論理的展開ができる文章力が必要です。多読者は、読書量が多いからといって、必ずしも文章力があるとは言えないようです。読書量プラス文章力の高さが成績の良さにつながっています。さらに、もう一つ重要なのは出席率が高く、勉学熱心なことです。「出席率が

高い」からとって、必ずしも成績が良くなるわけではないのですが、やはり A をとる人は出席率が高いようです。

#### 引用・参考文献

- 1) なぜ日本人は劣化したか 香山リカ 講談社現代新書
- 2) 大学生の読書生活 '87年度版 大学生協連読書調査委員会編 (1987) 全国大学生生活協同組合連合会
- 3) 大学生の読書の変—2006年と2012年調査の比較より 平山祐一郎 The Science of Reading, Vol. 56, No. 2 (2015)
- 4) 私は若者が嫌いだ 香山リカ ベスト新書
- 5) 紙の本は減びない 福嶋聡 ポプラ新書
- 6) 脳を創る読書, なぜ紙の本が人にとって必要なのか, 酒井邦嘉 実業之日本社
- 7) 死ぬほど読書 丹羽宇一朗 幻冬舎新書
- 8) 大学生の読書と電子メディア利用に関する調査研究—読書とインターネットの親近性 堀薫夫 大阪教育大学紀要 第IV部門 第50巻 第1号 (2001)
- 9) バイリンガリズムと誤解 山本雅代 月間「言語」Vol. 20, No. 8, (1991)
- 10) 英語の害毒 永井忠孝 新潮新書
- 11) 朝日新聞紙面 2013年8月28日
- 12) 親の計らい 曾野綾子 扶桑社新書